

「教育力のある」社会科学系科目をめざして
——フィールド・教室における対話を育てる教育手法研究

研究代表者	妻木 進吾	(経営学部)
共同研究者	松浦 さと子	(経済学部)
	奥野 恒久	(政策学部)
	鍛塚 賢太郎	(経営学部)

教室において学生と教員が構成する学びの空間をどのようにコーディネートすれば「教育力のある」状況が生まれるのだろうか。社会科学系科目委員会がその実現のためのキーワードとなると考えたのが、「対話のある教室」である。社会科学系科目委員会の構成メンバーは一昨年度より、「教育力のある大学」の実現に向けた授業実践を充実させるよう、この「対話のある教室」をキーワードに各科目担当者が実践を積み重ねるとともに、どのような手法や工夫、教材を用いているのかについて情報交換と討論を行い、カリキュラム改革に資する議論を重ねてきた。「対話のある教室」実現に向けた実践、そしてそれらの教員相互の学び合いという昨年度来の取り組みを本年度も継続し、「教育力ある」学びの空間構築を目指す。

具体的には、まず、(1) 学生同士、学生と教員、学生と社会 ———これら種々の対話を促し、「教育力のある学びの空間」を生み出す上で重要な機会となる「現場との出会い」を促す授業実践に取り組む。実社会の生活者、活動者、当事者、実践者といった立場の方々との交流から多くの示唆をいただきながら、学生が社会と対話するそのあり方を検証しつつ、未来を拓く学生の育成について考察を進めたい。また、(2) 教室での対話を促すための具体的なツール・教材（例えば地図）とその活用法の開発に取り組む。そして、(3) 社会科学系科目会議メンバー相互の教育方針や手法を学び合い、理解し合うための情報交換と討論を行う。さらに、こうした取り組みを通して、(4) 教学主体としての社会科学系科目委員会構成メンバーの協力関係を強化し、運営基盤の強化を目指す。

はじめに

「対話のある教室」、これは社会科学系科目委員会の教育力推進のための重要課題のひとつであり、今年度のFD研究の最大の課題でもある。講義に参加する学生が、自ら考え、問いや意見を自らの言葉で表現し、教室でともに学ぶ仲間と言葉でつながり、知識や疑問を共有する。その空間を促し、支え、構築するために、教員にいかなる工夫や努力が必要となるのか、この教育手法を研究することが、社会科学系科目会議の目標である。

すべての知識はインターネットを介して入手できると考えがちな学生を、人間の言葉と行動によって営まれているさまざまな社会活動の現場に導き、またそれらの現場から人々を教室に招いて学生に語りかけていただく機会創出を、我々教員は常に念頭に置いて、授業計画を立てている。あるいは、そこに自ら出かけたいと欲する気持ちを、そして自発的に問いたい、話したいと思う気持ちを学生に喚起しようと、シラバスを執筆している。

文献を読みこむためにも、人間との対話の経験は不可欠と考え、教室とフィールドをつなぐことが、社会科学系科目教育の最も重要な課題のひとつとなっていると言っても良い。

下宿先の家族、運動や文化活動・バイト先の仲間、あるいは祖母、祖父、父、母、兄弟姉妹、そうした人々と日常的に言葉を交わす機会はなくなったとは言わないが、向き合い語り合う学生たちの時間はおそらく日々短縮の一途を辿っていると思われる。コミュニケーションの手段は、Line や Twitter などスマートフォンを介した SNS に依存し、電話すらも苦手な学生たちは、言葉を発することに恐れすら抱いているかのように、教室では押し黙る。

ましてや釜ヶ崎の野宿者、東北被災地からの避難者、デモや路上で語る人々、福祉の現場で活躍する人々、そうした人々との対話の機会は、何をきっかけに起こりえるだろうか。

1-1, 「学生版市民メディアフェス 2015」開催協力

そうした学生の対話創出のために、社会科学系科目会議では、本年絶好の機会を得ることができた。それは毎年学生が参加する「市民メディア全国交流集会(市民メディアフェス)」の開催都市が宙に浮いていたことに起因する。2014年5月に愛知県で開催された第12回三河メディアフェスを最後に、どこからも主催の申し出が無く、都市や地域等のまちぐるみの開催が途絶えてしまっていたのだ。次にどこかが手を挙げない限り、このままメディアフェス自体が無くなってしまふことも十分予想された。現実には第一回開催を2003年に呼びかけられた津田正夫さん(初代市民メディア全国交流集会代表世話人・元立命館大学教授)が各地の負担面を慮り「ニーズがなくなれば自然に終わるものだから、無理して継続に固執しなくてもいい」ともおっしゃったほどだ。しかし全国各地の市民メディアの担い手たちが番組や作品を持ち寄り、成果やノウハウを共有する貴重な機会となってきたメディアフェスがなくなるのはあまりに惜しい。学生だけでメディアフェスを開催してみないかと呼びかけてみた。毎年学生と参加してきたイベントとはいえ毎年、参加経験のない学生たちをいざなうハードルは高い、ましてや主催など。苦労を予想した大半の学生は面倒そうな表情を見せたが、ごく一握りの学生が「おもしろそうですね」と表情を輝かせ、初の学生主催を思い立つ。

それが「学生版市民メディアフェス 2015」を開催するきっかけである。2015年6月のことだ。龍谷大学の学生にとって幸運なことだったと振り返る。

1-2, 学生版メディアフェス緊急キックオフ

全国市民メディア交流集会を代表する関本英太郎さん(市民メディア全国交流集会代表世話人・元東北大学教授)は、学生たちの開催グループ立ち上げ集会支援に京都に駆けつけてくださった。そこにこれまでメディアフェスに参加した学生は誰一人いなかった(昨年参加した学生は就活中)。メディアフェスの歴史も展望も知らない、内容もまだ計画できないなかで、市民のメディアへの期待だけでとにかく開催する気になった学生たちを、関本先生は無謀と言わずに全面的に信頼してくださった。学生たちも、これまでの主催団体の協力を得ることを足かせには考えず、むしろ見守り役の先輩たちがとりあえず全国におられることをわずかな希望材料にできたようだ。ただ、そのとき彼らの手元にあったのは、教員とゼミで話し合っただけで作った12月19-20日に予約した和顔館380席と響都ホール400席の龍谷大学施設と、ゲスト候補を列挙した簡易な企画書のみ。代表を名乗ってくれた吉見直樹(政策学部3回生)は、思いが正直に表情と態度に出るタイプ、自信のなさからか声のボリュームが落ちて来たとき、しっかり者の女性たちが彼を支えようと後に主要メンバーとなる。

初の学生主催を前面に押し出す学生たち。共同代表となった西村紗帆(法学研究科修士1年)は学内討論会などの催事を仕切った経験が豊富で、オトナの手を借りず学生が自立して開催することにプライドを感じてくれたようだ。一方で、市民メディアの歴史と12回の連続性を資源として尊重することの意義も理解してくれた。開催地それぞれにプログラムの内容は全く異なっていたのだから、自由度は高い。しかしモデルがあるわけではない。限られた資源で、独自性を持った企画をどのように立ち上げてゆくか、考える時間も十分ではない。西村さんはハードルが高いほど「おもしろそうだ」と挑戦的で意欲的だ。

1-3, 市民メディアフェスの歴史

市民メディアとは、市民が自らの資源を持ち寄り主体的に意見や表現を伝えるメディアのことで、オルタナティブメディアやコミュニティメディア、インディペンデントメディアなどと多様にその特徴が言い表されている。マスメディアとは異なり、財源、担い手、目的、形態等は全く定まっていはいないものの、社会問題の可視化、文化的多様性の共有、多様な価値観の理解や創造、社会的排除の削減といった目的の活動が 1990 年代前後から始まった。市民メディア活動の勃興期、例えばインターネット元年と呼ばれた 1995 年、阪神淡路大震災直後に神戸市長田区でボランティアが中心にコミュニティ放送局 FM わいわいで多言語放送を始め、1998 年には「目で聴くテレビ」（2001 年に NPO 法人に）が手話と字幕で CS 放送を開始、2001 年にはアイヌ語放送 FM ピパウシがミニ FM 放送を二風谷で開始、同年アメリカ同時多発テロとその直後の報復攻撃反対のムーブメントを背景に NPO 法人 OurPlanet-TV が活動を始め、2003 年に日本で初の NPO のコミュニティ放送局が京都に設立（京都コミュニティ放送）など、各地で新しいメディアが立ち上がっていたことが、2004 年 1 月、第一回全国市民メディア交流集会の名古屋開催につながる。企画段階の主会場は 70 名定員の会議室だった。まさかそこからあふれるほどに人が集まるとは予想できず、急遽大集会室を確保したことを思い出す。市民メディアはそれほど最近急激に拡大している。

名古屋集会閉会式に次回開催に立候補された米子市の中海テレビネットワークの高橋孝之さん（当時）が 2004 年末に実施、2005 年は住民ディレクターの先進地で岸本晃さんらが呼びかけた熊本県山江村、2006 年には故原総一郎さんが横浜に輪を作り、2007 年加藤知美さんらが札幌に、と開催に自発的に手が挙がってきた。その後も 2008 京都、2009 東京、2010 武蔵野、2011 仙台、2012 上越、2013 大阪、2014 三河と、各地で招き合ってきた市民メディアフェス（という愛称は京都開催から）だ。手弁当で開催されてきたが、次第に助成金や科研費を活用、学会並に分科会を多数擁した複線型のプログラムになるなど、次第に大イベントに膨らみ、開催を躊躇する町もあっておかしくなかった。2011 年に予定されていた仙台は、東日本大震災で開催は無理だろうと思われたが、関本榮太郎さんが被災地の市民メディアの目覚ましい活動に支援をと開催を呼びかけ、臨時災害放送局のりんごラジオの高橋厚さんらをせんだいメディアテークに招いてくださった。しかしその後も主催地のサービス精神から大規模化が進み、世話人の方々や私を含めたボランティアが高齢化していた。

今回、手を上げた学生たちに「シンプルでいい、集まれることが大切」と声をかけてくださる方が少なくなかった。第一回から参加していた下村健一さん（市民メディアアドバイザー、OurPlanetTV 副代表）は、自発的に助っ人にかけて各地の学生の映像作品を上映し「きっとすばらしい作品が集まるよ」「君たちは冬季オリンピック、若さを武器に小規模でも記憶に残る何かをやるはず」と学生を励ました。開催まで学生たちが持ち堪えられたのは「君らならやる」と学生の背中を押した方々のおかげだ。

さらに、2015 年の開催を相談していた沖縄のコミュニティ放送 FM よみたんの仲宗根朝治さんから「今年は戦後 70 年企画で忙しいけれど、来年 2016 年なら開催できるかもしれない」との朗報が飛び込んできた。学生たちは 1 年の隙間を埋める役割が与えられたのだ。少なくとも、彼らによって市民メディアの小さな「歴史をつなぐ」ことができるのかも。FM よみたんのみなさんのおかげで。

1-4, 公募プログラム

シンプルに楽しく進めよう、共同代表の西村さんは、スタッフがともに時間を過ごす企画会議をレギュラー開催するようにし、FaceBook の公開サイトを立ち上げ、運営状況と企

画の進捗状況を共有し、スタッフ共同アドレスを作り、Line で連絡をとりあった。既読がつくかどうか、彼らの信頼関係の証となっていた。

参加説明会にやってきた学生たちは次々と消え、夏休みを超えることができた学生スタッフはたった5名。しかし具体的なプランはあまり進まなかった。ただ、この漠然とした時間は、基本方針を固めるために必要だった。このとき単線型のプログラムにすると割り切り、集う人々が同じものを見て語り合う形式に決めたことは、小規模の開催地では今後有効だと思う。全国から学生や若者の映像作品の上映・プレゼンを公募すること、全応募者に発表機会と参加者との対話の時間を設けること、この2点に活動を絞った。対話と交流の2日間、これこそが自分たちの創り出す公共財だと認識して、公募内容と意味を自覚していった。

「メディアフェス 公募」で検索すれば今もヒットする。「2003年から続く市民メディアフェス(市民メディア全国交流集会=各地で活動するメディア活動の担い手が交流する集会)、今年は「学生版」で開催します。僕たちの市民メディアフェスは、作品を発表して発信の場、交流の場となることを目的としています。主に、映像作品を中心に『社会に対して伝えたいこと』『叫びたいこと』など思いの詰まった作品を募集します。もちろん、音楽やパフォーマンス、新聞・写真などの表現作品も大歓迎です！例えば、「いやだ！ブラックバイト」「原発反対！」「就活への不平不満」「格差問題」...などを大募集！参加決定団体には、12月19日または20日に、15分から45分の質疑応答を含めた発表の場を設けます。発表スタイルは問いません。思いのこもった作品で、みんなと語り合きましょう！エントリー期日は2015年11月13日(金)までです。学生・若者大歓迎！大募集しています！！」2015年夏、学生たちは忙しかった。路上や国会前にいた学生たちも多かった。目覚ましい学生たちの表現の進化に期待は高まった。きっと社会に訴える映像が集まるだろうと。

全国の学生たちにどこまでアピールできるのだろう。広報で初めて活躍の実感を持ったのが木村夏奈(政策学部3回生)。鉛筆でこねくり回していたロゴデザインを、ゼミOBのウェブデザイナー宮内めぐみさんに整えてもらい、ウェブとチラシと印章と大看板に活かしたことでメディアフェスが自分のものになった。また、事前に京都コミュニティ放送の番組に招かれ、メディアフェスの予告と内容の告知を行った。新聞各紙への広報は大学広報と教員が行い、事前に京都新聞と毎日新聞が掲載してくださったが、当日の参加し内容を取材くださったメディアはなかった。広報のノウハウは再検討して後輩に伝えて欲しい。

1-5, 発信と交流 舞台と会場

開催前夜も深夜まで準備が続き、開催当日も学生が自主的に早朝集合していたのには驚いた。学生が99%の仕事を自己管理し運営し、教員は、機材と教室の貸出など学生の指示によって動いた。配布物の印刷など、ギリギリに仕上がったものばかりで、よく間に合ったものだ。

公募の結果、多様な主題を携え、北海道から沖縄までの学校単位のほか、北海道(精神障害者のメディア活動)やドイツ(原発最終処分場の日独の村)からの応募もあった。東海大学(タ張炭鉱や戦後の歴史をインタビュー)、法政大学(川内村を訪ねて)、大阪芸術大学(ヘイトスピーチのドキュメンタリー)、武蔵大学(被災地支援のための対話・メディア活動の国際取材)、同朋高校(日本兵の記憶をたどるもの)、長野県松本深志高校(制服を問う作品)、麻布大学・デジタルハリウッド大学(水源を辿る地元CM)、横浜国立大学(原発事故避難者に聴く)、名古屋大学(中国残留孤児にインタビュー)、沖縄国際大学(沖縄のメディアを問う)、龍谷大学(学生生活や地域を紹介する映像や新聞制作)の15グループを調整しプログラムに配置した。上映後の交流の時間を作るために、応募者の希望す

る上映時間を差し上げられなかったことを申し訳なく思っている。コミュニティ新聞の制作過程の報告など、映像のみならず興味深いメディア活動も発表された。いずれの作品もそれだけで上映と講演会ができる内容を持ったもので、何度も現場に通いつめて撮影されたものから、スマホを用い手軽に短時間で作られたものまで、現代のモバイルジャーナリズムの一端を覗かせる作品が集まった。持ち込まれた映像素材は、DVDの形式が各団体とも異なり、映像・音声の出力が複雑でプログラムの運営が混乱することが予想された。そこで、信頼を集めたのは田和拓朗（政策学部3回生）だ。今回、会場担当の技術専門職員との連携に責任を持ち、すべての素材の上映に成功し、エンディングでは主催スタッフ全員が胸をなでおろした。

司会は昨年卒業したばかりの西村唯さん（NHK高知放送局アナウンサー）を高知から呼び戻して依頼した。ウラをとってから話すよう職場でしっかり躰けられているのだろう。スタッフに丁寧に確認してから進行してくれた。アナ1年目にしては大舞台の仕事できっと緊張していたと思うのに、後輩の前で自分を振るい立たせながらの挑戦だったようだ。

ひとつひとつの上映作品を紹介したいが、紙数が限られる。上映作品のいくつかは、ネット上で観賞可能だ。プログラムもウェブサイトに掲載した。タイトルを検索していただき、映像はそれぞれの発信をご覧いただければ、と思う。それを見守った学生との意見交流にこそ、今回の学生版メディアフェスは意義を見出している。そのための十分な時間を用意でき、ファシリテーションを学生自身が回せるようになることが今後の課題で、学生がもっと経験を積みたいと反省したことが重要だ。主催校を中心に関西の学生たちが会場インタビューを務め、遠来の参加者の皆さんに上映の手応え、映像観賞の感想、メディアフェスへの評価などを伺い、Facebookに掲載した。質問の底の浅さ、ピントがずれ呆気無い反応をしてしまう経験の無さゆえの拙さに、来場者のみなさんは苛立たれたことと思う。しかし、これは学生に教育の機会・修行の場を提供したと思召していただきたい。初対面の方にもものを尋ねる経験が全くなかった学生にもマイクを持たせていただいた。不完全・未完成が学生の魅力だと、おおらかにお許しいただいたようでアンケートでも「若い人たちが積極的に議論に参加している姿勢は刺激になる」となどと40-50代の方々が評してくださっていた。また会場全体に一体感があったというご意見もいただいた。あまりに未熟なやりとりを、ときどき助っ人アドバイザーの下村健一さんやメディアフェスの先輩のみなさんが見かねて助け舟を出してくださり、会場が笑いに包まれることも何度もあった。参加者アンケートで最も人気のあった『ヘイトスピーチ』。これを卒業制作した平木篤さんに「どうしてこんなに近くから撮れたの?」「指導が原一夫先生（ドキュメンタリー映画監督）で、とにかく近寄れと言われたので」「けがしなかった?」「殴られました」と、スリリングな撮影現場の様子が伝わった瞬間もあった。障害をもった人々のメディア制作を進めている「障害者のメディア事業所ここりか・プロダクション」の阿部幸弘さん（精神科医師・メディアフェス常連）は「ヘイトの対象に障害者が狙われることを危惧している」と深刻な差別を憂う声も、メディアフェスならではの議論だと思う。この作品だけでなく、多くが制限時間内に収まるよう切り取られていたので、どうか上映機会を見つけて、見にゆかれることや、授業に作者を招いて討論の機会をつくっていただけたらと思う。



(2015. 12. 19 龍谷大学和顔館 B201)

1-6, インタビューの学生記者たち

「社会学のすすめ」「マスコミ論 A」「コミュニティメディア政策」の受講生は、このメディアフェスに参加することと、来場者へのインタビュー、会場での発言を平常点に組み込むことにしたため、貴重な教育資源にもなった。会場が大きな教室であったことを思い返すことができる。一部のレポートを掲載しておく。

龍谷大学社会学部『滋賀ふしぎ発見』の堀井春香さんにインタビュー 国際文化2年

面白くてわかりやすい素敵な作品であったためまずは「映像の構成やリポート、水中カメラ等で工夫したこと苦労したことは？」と質問した。堀井さんは、「カメラに苦労した」と答える。「前半は別の子がカメラを担当してくれたがスケジュールの都合で後半は私が担当した。カメラは苦手だったのでその子に追いつけるようにカメラワークや場面の切り替えについてなど勉強をした。あと水中カメラについて、鯉はやっぱり魚なのでカメラを入れたらすぐに逃げてしまう、寄ってきてくれるのはタイミングといかにかみながら釣るか。黒の鯉が多い中、画面映え的にもカラフルな鯉が欲しくてそれに時間をかけて撮影した」とはにかみながら答えた。その答えに私は作品の面白かった一部分である映像の途中にまるでテレビ番組のように案内してくれたおじいさんの存在が気になり、次にそのことについて質問した。すると堀井さんは「それは偶然。自治会長には許可をとってあるが町の人にはアポイントはとっていなかった。なので人を見かけたら突撃ということで声をかけ続けていた。おじいさんはその一人」と答えた。引き

続き私が「作品の上映と反応についての感想は？」と訪ねると、「反応が返ってきた、みんなが笑ってくれたのが嬉しくてほっとした」と堀井さんは答える。最後に私は唯一の龍谷大学からの発表者として当イベントについてどう思っているのかを訪ねてみた。堀井さんは「市民メディアフェスは今年初めて知った。社会学部のジャーナリズムの先生が私たちが映像を作っていることを知り声をかけてくれて参加した。色んな大学や人々の映像を見ることができてとても勉強になった。」と答えた。面白い作品を作るだけあって堀井さん自身も話し方が上手で良い雰囲気インタビューを行うことができた。

長野県松本深志高等学校 佐野あきさん にインタビュー 国際文化 2年

『制服ガラパゴス2』で発表をされていた佐野さんにお話をうかがった。制服がない松本深志高校だが、それについて佐野さん自身はどう思われるかという質問に対して、自分の色が出せる、大勢の生徒のなかで自分はここにいるという存在を表せられると話してくださった。制服がないことによって高校生の犯罪などは増えないのかという質問に対しては、制服のある高校と変わらないという答えだった。逆に、地域としても制服がないことで校色がなくなり、地域で学ぶ高校生という捉え方で、高校生に対して寛容であるという。

また、映像のなかで取り上げられていた「折衝会」について私は大変興味を持ったため、そちらについてもうかがってみた。折衝会では、予算請求をめぐる熾烈な討論を繰り広げていたが、その後生徒同士や部活動同士で関係が悪くなることはないのかという質問に対しては、皆折衝会に向けて大変な苦勞をして挑んでいるため、終わったあとはやっとならなくなった、お疲れ様とたたえ合っており、関係が悪くなるようなことはないと答えてくださった。また、あれほどの激しい論争をしてまで折衝会を続けるメリットはなにかとうかがったところ、請求した予算を大切に使える、また折衝会を通して他団体のことも知れるとのことだった。

今回の市民版メディアフェスを通して、学生が製作したものとは思えないプロ並の映像や編集技術を目の当たりにしてよい刺激となった。また、映像から学ぶこと、知り得ることはたくさんあるがその情報を鵜呑みにしてはいけないと強く感じたとともに、特に東北の映像をみて、自分の足で現地におもむき、自分の体で確かめたいと感じるようになった。

せんだい泉 FM 阿部清人さん にインタビュー 国際文化 2年

客席に座っていたスーツ姿の男性にお話を伺うと、その方は翌日の『被災地とつながって』で発表を控えているせんだい泉 FM の阿部さんであった。宮城県からお越しだという阿部さんに今回の市民メディアフェスの印象をうかがったところ、学生の積極性に驚いたと話してくださった。フェスの冒頭から、この大勢のなかで積極的に手を挙げて質問をしたり、自らの意見を述べたりしている学生たちの姿をみて「関西の学生はすごいなあ」と感心したという。

今回上映した映像のなかには高校生が制作したものも含まれていたが、それについてどのような感想をお持ちになったかがうかがったところ、高校生とは思えない出来に驚いたと話してくださった。特に、同朋高校放送部のみなさんの戦争についての映像を通して、戦争について改めて考えさせられたとのことだった。

また、阿部さんはこのメディアフェスでの発表をご覧になって、学生がパソコンやカメラなどの機器を巧みに使いこなしていることに感心したとおっしゃっていた。現代では、昔にはなかった機器がたくさん生まれており、さらに機械が使いやすくなっていることもメディアフェスの活性化の要因だろうと話してくださった。

学生版である市民メディアフェスを大人の方の目線から見ると、どのように見えているのかという貴重な意見が聞けた。私たちは生まれたときからパソコンなどが普及している時代しか知らないが、そのようなものがまだ発展していない時代を知る方々からすると、このメディアフェスもまた違った驚きや発見があるのだということに気づくことができた。

東海大学文学部広報メディア学科「街の記憶～閉山から25年夕張の今～」国際文化 2年

やはり、夕張と聞くとメロンのイメージしかなかったです。いざ行ってみると、思っていたより静かな街で驚きました。夕張の人たちは暖かく、心の優しい人がたくさんいて夕張を訪れてよかったと思えました。今後の夕張については、観光客が増えることも嬉しいことですが観光地としてよりは、街の人自身をもっと元気になってほしいと思います。今回夕張を訪れたことで今まで起きた出来事など、初めて知ることが本当にたくさんありました。しかし、まだまだ興味が出てきたのでまた行きたいなと思っています。

東海大学文学部広報メディア学科「体験者から聞く戦争の記憶～戦後70年を迎えて～」国際文化 2年

戦争を経験した6人の人の生の声が印象的でした。やはり、実際に戦争を経験している方のお話はリアリティがあり恐ろしかったです。戦争についての証言を得ることは難しくつつありますが、若い世代の人達も戦争についてもっと深く考えていくべきなのだなと思いました。今の自分の生活が本当に幸せだなと改めて実感することができ、もっと感謝の気持ちを持って生活しようと思います。

武蔵大学の『学生による被災地支援のための市民メディア活動』 国際文化 2年

インドネシア・アチェとの被災地間対話の中で、Skypeを使用して対話を行うこともある、とおっしゃっていた。そこで「フェイストゥフェイスでない状況、画面越しでの対話はどのような点が苦労したのか」という質問をした。そこで返ってきた答えはやはりフェイストゥフェイスではないからこその苦労であった。まず、お互いの言語の違いについてだ。使う言語が違うため通訳を挟んでの対話となり、二倍ほどの時間がかかってしまうためその間ラグが生じてしまう、というものであった。これは活動が始まった2011年当初から抱えている問題だという。また、対話先である小学校の子どもたちが内気で積極的に話をするのが難しいという問題がある。その問題は対話が始まる前にジェスチャーゲームを行うことで心も体もほぐして話しやすい環境を作って解消しているという。筆者がこの疑問を持った際、「フェイストゥフェイスでないため対話をしていく上でニュアンスが伝わらなかつたり、また取り違えたりするのではないか」と予想を付けていたのだが、それよりももっと根本的な言語の違いに戸惑い、またその言語の違いが引き起こすタイムラグなどをどう解決すべきなのか、という壁にぶつかっていた。この問題を解決するためにはやはり、自分たちが相手の言語を理解できるよう努力するしかないと考える。

NHK 高知放送のアナウンサー西村唯さん 経済学部1年生

メディアフェスの司会を見ていた私は、どのようにしたら人前で話せる人になれるのかと疑問に感じたので質問したら、失敗を恐れずにたくさん話すことが重要だと答えた。その他にも、場を和ませるようにすること、空気を読むこと、どうすれば人に伝えられるかということを中心に答えた。次に、私は人前で話すときに緊張した時の対処法を聞いたところ、緊張も楽しむべきだと答えてくださった。私は、そんな発想がなかったので、なるほどと感じた。そして西村さんからいただいたアドバイスをこれから私は実践していこうと思った。

後は会場の様子はどうだったかと聞いたところ、みんなが集中して話を聞いており、積極的に手をあげ参加しようという意欲が素晴らしくてびっくりしたと仰った。学生市民メディアフェスに参加して、積

極的に参加することや、インタビューの大切さが改めて実感できた。また、このような機会があれば、ぜひとも参加して積極的に発言していきたい。

ラジオ関係の仕事をしている方にインタビュー 文学部1年生

ここりカプロダクションの発表について関心をもったそうで、興味深いお話をしていただいた。テレビなどで流れているものは障害者の方からすると外国のものに感じるという。例えば、耳が聞こえない方がテレビの放送を見て何を言って楽しんでいるのかわからない。このような場面でどのように私たちが感じ、どう楽しさを伝えていくかが大切であるとおっしゃっていた。また、障害をもっている方にこういった問題が生じてしまうということに多数派である健常者が気づくことができるかということも注目すべき点である。

また、市民ラジオの代表もされており、授業中に話題になったことについても聞いてみた。市民ラジオを運営する際の資金等は自分たちで出しているそうで、学生ならばバイト先にスポンサーになってもらおうそう。運営は大変だが、好き放題できるのでいいとおっしゃっていた。

私自身学校での授業以外ではほかの人の発表を聞く機会が初めてで、少し身構えながら発表を聞いたりインタビューを行ったりしたが、どの団体も自分たちが取り組んできたことに誇りを持ち、それぞれの良さを伝えようと試行錯誤されているのがとても強く伝わった。一から自分たちで作りに上げていくことは大変だと思うが、もし機会があれば私も携わってみたいと感じた。

「ここりカプロダクション『精神障害者のメディア事務所・ここりカプロジェクト活動紹介』」について阿部幸弘さんにインタビュー 法学部1年生

Q1「ここりカプロダクションで障害を持っている方が自分の体験や症状について語ることで社会や障害を持った方をサポートする施設などに何か影響はありましたか？」

A「学生団体の方が直に精神障害者と出会った時、精神障害者が普通の人間ですよ、ということを最初に理解してもらった。福祉の専門家になった方が初めて精神障害者と出会った時、それが伝わるということは大きなことです。」

Q2.「ここりカプロダクションで活動していて苦労していることは何ですか？」

A「障害を持っているので疲れやすい人が多いです。だから無理をさせないように、だけど頑張ってもらわなければいけないといったバランスが難しいです。」

Q3.「ここりカプロダクションで活動していて達成感を感じたことや、良かったなと思ったことは何ですか？」

A「私は理事長で直接現場での指導はしておらず、一年経ってからみんなの声を聞くのですが、みんな仕事に手ごたえを感じていて、喜んで仕事に取り組んでいると聞き驚きました。メディア活動は内容が決まっておらず何をやるか、ということから考えなければいけないので時間はかかりましたが結果、自分たちがやりたいことをやれるという良い方向に少しずつなっていることが手ごたえとなっています。」

以上の質問に答えて下さいました。私は今回、ここりカプロダクションの映像とインタビューで障害を持った方がこれからの社会でもっと活躍出来る場を増やし、社会全体が障害を持った方への理解をし、サポートするべきだと感じました。

東海大学文学部広報メディア学科水島研究室「街の記憶～閉山から25年夕張の今～」経営学部1年生

この発表を聞いて感じたことは夕張の街の移り変わりはもちろんだけど、このテーマを設定して、ここまで濃い内容になるまでどれくらいのインタビュー、そしてどれくらい夕張の街に行き話を聞かれたのかなとおもった。そこで発表されたかたに聞いてみたところ、10回以上は行っていると言われていた。遠い北海道の地にそれほど回数を重ねたからことここまでの深

い内容まで聞いたのだなとおもったし、やっぱり何かのテーマを調べたり、何かを発信するためには一回ではなく、何回も聞くことが大切なのだとわかった。

麻布大学「Aone Media Lab」渡辺俊朗さんにお話を伺う。 経営学部1年生

渡辺さんは神奈川県青根をもっとたくさんの人に知ってもらおうという活動を大学でしておられます。発表の感想をお聞きしたところ、「会場が暗くて緊張しました。プレゼンはやっぱり慣れないです」と言っておられました。次に反省点や印象に残ったことをお聞きしますと、「構成が難しかったです。要素がたくさんあってもまとめるのが難しかったですね。伝えたいことはたくさんあるんですけど…」と言っておられました。限られた時間の中で青根の魅力をどのように伝えるか、苦勞したそうです。また印象に残ったことについては「魅力について話して欲しいと言われたときは嬉しかったですね」と言っておられました。青根に興味を持ってくれる人が少しでもいたことが嬉しかったそうです。最後に今回、市民メディアフェスに出てどうでしたかとお聞きしたところ、「貴重な体験でしたね。違う学部の学生の意見も聞いて良かったです」と言っておられました。学生版市民メディアフェスということで学生ならではの身近な意見や考えを聞けることが良かったみたいです。

私はメディアの交流にあまり興味がなく、まだ学生だからと思っていましたが、今回の学生版市民メディアフェスに参加して、学生なら学生の立場からの意見や考えを持てばいいんだと前向きに考えることができました。

麻布大学「Aone Media Lab」渡辺俊朗さんにお話を伺う。 法学部1年生

Q:水のプロモーションビデオとても素晴らしかったです。あのビデオは、どのようにさつえいされたのですか？

A:私自身映像を撮るのは初心者で教授にカメラワークの指導を受けながらあのビデオを作ることができました。

この質問をするとき私の予想では彼は、映像を作る知識に関しては豊富でカメラワークも慣れているものだと思っていました。それほど素晴らしい動画でした。

Q:今後の目標、抱負などあればお聞かせください。

A:実は私も1回生で、まだわからないことがたくさんあります。今後の目標としては、地元を盛り上げていくために、地元のCM動画をたくさん撮影して地元の良さをより多くの人に広めていきたいのと、またホームページがあるのでそこでも地元の広告をしていきたいと思います。

私はこの回答を聞いているときに彼が私と同じ1回生なのを知りました。私と同じ1回生なのに地域を盛り上げるために真剣になっている姿や、地域を盛り上げるという大きな目標を語っている彼を見ると、情けなさを感じ、とても感銘を受け、いい刺激になりました。

1-7、「女性」、「脱走兵」、そして「コミュニティラジオ」世代を貫く反戦

学生自身が企画運営した公募上映枠とは別枠として進んだ企画が3つある。

2013年に大阪メディアフェスを担った下之坊修子さんは現在、河内長野に農家を買取り、農の生活を五感で楽しみながら映像制作や上映会を行っている。長岡野亜さんは滋賀県を中心に伝統の祭り復活や高齢住民の次世代へのメッセージに注目する住民参加映画制作を進めてきた。この市民メディア活動家の女性たちやSEALDs KANSAIの長井優希乃さんにも声をかけ、学生女子スタッフの西村さん・木村さんは、「トークセッション・メディアフェス的女子会」開催を計画した。テーマは「地方、女性、若者」。東京中心のマスメディアに排除されている存在にこそ、市民メディアの主役が居て、自ら輝いていることを知っても

らおうという意気込みだった。しかし司会の堀潤さん（元 NHK アナウンサー）と十分な打ち合わせができず、参加者の関心はどちらかというと堀潤さんと SEALDs 女子に集中、政治的な活動への学生の関心、反戦が女子会のテーマになった。

主催学生のうち政策学部コミュニティメディアゼミの学生は、地域で古いフィルムを集め、地域住民の方々と観賞する「コミュニティアーカイブ」「町家シネマ」活動に取り組んでいた。ベトナム戦争時に龍谷大学近く伏見区竹田の実家に小山帥人さん（フリージャーナリスト、市民メディアフェスに第一回から参加）は当時、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）の知人から頼まれ、キャルという 19 歳の脱走米兵を匿った。その時「メモをとってはいけないと言われたが、動画を撮影してはいけないとは言われなかった」と、小山さんは滞在中の脱走兵を 16 ミリフィルムに記録、オープンリールの録音機でインタビューまでも残していた。にも関わらず、秘密を守る約束を違えず、小山さんはそのフィルムの存在すらも秘密にしてきた。しかしキャルと同世代の大学生が伏見区の古い映像を探していると聴き、2015 年 1 月、初めてその封印を解き、反戦のメッセージを伝えたいとフィルムを持ち出してくださったのだ。畳敷きの町家キャンパスに地域の人々や学生たちに見せたのがきっかけとなり、小山さんは脱走兵のその後を探すために渡米し、キャルと再会し、戦争とは何かについて語り合う。この小山さんの半年を追った毎日放送のドキュメンタリー番組「我が家にやってきた脱走兵 ベトナム反戦運動・47 年目の真実」は芸術祭賞優秀賞を受賞したが、メディアフェスでの上映には小山さんの桃山高校時代の同級生も会場に来ておられ、学生に戦争の怖さを語ってくださった。安保法制が可決された年に、半世紀前の若者たちから、現代の若者に託してくださった平和への願いを、学生たちは受け止めたのだろうか。

「コミュニティラジオ、世界から、関西から、東北から、沖縄から」では、世界コミュニティ放送連盟 AMARC のガーナ共和国大会に参加した橋爪明日香さんが、アフリカの若者たちがラジオを用いて、貧困や伝染病、人口問題、食糧難、言語の残存をテーマに語っていることを動画で報告した。毎回テーマになる女性や子どものラジオ、今年は 10 代の少女がラジオで、コミュニケーションを通じて人に影響力を与え、自信を得たことをスピーチしていた。FM わいわいでは金千秋さんが関西学院大学との商店街コラボイベントを、舞鶴市でのコミュニティ放送の立ち上げの進む様子をパーソナリー志望の学生・柴田美智子さんが、また東日本大震災から 5 年を経過した東北でいかにラジオが人々を励ましているかをせんだい泉エフエムの阿部清人さんがまとめ、臨時災害エフエム放送に電話をかけ、富岡町おだがいさまエフエムの吉田恵子さんは、街全体がまだ仮設住宅で暮らしておりこのまま放送が継続するものの、女川さいがいエフエムの大嶋智博さん、亘理災害エフエムあおぞらの吉田圭さんが経済的に厳しい状況で放送を終えなければならない状況にあることを語った。沖縄の FM よみたんから仲宗根朝治さんがお越しくださり、日本最大の村、読谷村では、140 名のボランティアパーソナリティが、おじい、おばあから 70 年前の戦争の記憶を語りついでおられる様子を紹介してくださった。2016 年のメディアフェス開催を沖縄国際大学とともに引き受けてくださるといふ。市民メディアフェス開催地のバトンは無事に沖縄に渡った。

「ベトナム戦争時に脱走米兵を匿った」についてインタビュー 経営学部 1 回生

学生版市民メディアフェス 1 日目で小山帥人さんはベトナム戦争当時、京都の実家に 19 歳のアメリカ人脱走兵をかくまったことを、16 ミリフィルムで撮影した映像とともに話してくれました。発表が終わった後、小山さんと同世代の方にインタビューをしました。全体を聞いた感想を聞くとその方は、アメリカ人脱走兵の「脱走を後悔はしていない」という言葉が一番印象に残っていると言いました。映像でア

アメリカ人脱走兵は、戦争は組織的殺人と言い戦争から逃げるには脱走するほかなかつと語っていたのに心が痛んだそうです。また今回の発表では、加害者側の視点から語られる戦争について多くを聞くことができ、戦争を体験している父に昔聞いた話と重なるところが多々あったそうです。今回改めて戦争が人に与えた影響の大きさに気づき、二度と起こさないことが先人への弔いになると言っていました。

私が今回のインタビューをしてみて思ったのは、戦争に触れている人が今の若い世代に語っていく機会がこれからも必要だということです。私自身今回の発表、他の方の意見を聞いて、戦争の事実をありのままに語り継ぎ風化させないことが大切だと感じました。戦争当時のことを包み隠さず伝えられるのは、当時を生き抜いてきた方にしか出来ないとても大切なことです。私はこれを機にこれからも戦争についての講演会に機会があれば積極的に足を運びたいと思いました。

「ベトナム戦争時に脱走米兵を匿った」についてインタビュー 政策学部1回生

12月19日土曜日、脱走兵についてのことに関して質問した。脱走兵を受け入れる時、あなたはどんな心境だったかまた自分が脱走兵をかくまったことで自分たちに危険なことが起きないかあるいは考えなかったかという質問をした。このことに関して、小山さんは実際この依頼をされたとき、断ってしまうと自分も戦争に加担してしまうことになるのではないのか？という思いを抱いたこともあったそうです。ある住民が脱走兵をかくまったが実はその人は脱走兵を調べるためのスパイだったなんてこともあったそうです。だまされた人は「自分はなにやってたんだ、せっかくかくまって、あんなにもてなしたのに実はスパイだったとはなんて仕打ちだ」と不満を呟いてもいました。それを聞いて自分もこんな状況に遭うかもしれないという思いを抱いたとも聞きました。また脱走兵に当時、日本に潜伏している時、日本に対してどう思ってたかを聞くと日本が羨ましいと答えた。日本はアメリカと違い徴兵制がなくGHQが作った平和憲法があるので今の自分と同世代の子たちが戦争に参加しなくてもいいからと答えました。これらの話を聞いて自分は当時の人たちはよく行動をおこしたなと思いました。自分がその場であれば自身の安全を保障することを優先するでしょう。普通は危ないことに自ら関わろうとは考えません。と同時に今の日本はなにをやっているのかと思いました。

1-8、ファンドレイジング（資金調達）における対話

主催の決意がなにせ遅かった。各種助成金は目指したものがどれも採択されず、目処が立たないなかで、学生が自ら新たな助成申請を模索した。開催が迫っていても応募できる公募助成情報を得て、企画書を書いたようだ。ここをとても後悔している。下村健一さんが勧めてくださったクラウドファンディングも結局時間的な制約に学生は手が出ず、学生5名がそれぞれ役割を決めて、個室に籠るような仕事の割り振り方はよろしくなかった。資金調達はオープンに全員で取り組むべきことだったと思う。結果として学生は自分で資金調達を「しなかった」。助成団体の方にお聴きできたのだが、申請者である学生と電話での連絡がつかなかったと聞かされて、学生の電話嫌いには呆れるばかりだった。「一度だけ電話がつながり面接日程をご指定したのですが、平日はバイトで忙しいから日曜にしてほしいと言われましたよ」と助成財団の方に指摘されたときは、恥ずかしいことと私が目を伏せるしかなかった。

仕方なく、多くの方々を巻き込む「応援団方式」をとることにした。教員がでしゃばるのはどうかと思われたし、実際「学生主体で開催するというのに、学生が依頼してこないのはいかがなものか」とのご指摘はいただいた。しかし、今回はプログラムの運営進行で学生はかかりきりになってしまったため、教員が学生に代わって、同僚、過去のメディアフェス開催者、市民メディア活動に理解のある大学教員の方々等、御縁がつながる限りの応

援団のみなさまにご協力をお願いさせていただき、ご寄付を募った。応援団としてプログラムやウェブサイトにお名前を挙げさせていただく条件は、メディアフェス開催当日に参加くださること、または、入場料相当のカンパを振り込んでくださることだったが、京都近隣の市民メディア関係者、メディア研究者、映像制作のお仕事をされている方、学内関係者、友人知人の個人的なご支援に頭が下がった。本当に感謝に堪えません。ありがとうございました。一方、プログラムにお名前があってもまだお振り込みいただけない方もおられる。市民メディアの経済的な失敗を体験し、厳しさを自覚した。応援する気持ちはあるが、現金の要請には応えられないとする方が少なくないのだ。現況は、会場費を龍谷大学に支援を得て、各予算をかき集め、大口の支払いを済ませ、主催者で負担することで何とか収支は収まっている。今後、振り込んでいただいたものは、次回開催地に託すことにしている。プログラムに出処は明示させていただいたが、学生にファンドレイジングを経験させることは大きな学びとなったであろうと思うと後悔もある。しっかり者の会計系の西荒井希さん（経済学部3回生）が今頃、プログラムと通帳を見比べているかと思うとつらい。実際に、市民メディア活動の多くが、このような財政問題で悩んでいる。広い意味で痛みをわかちあう、ということ、メディアにはコストがかかるということを学生スタッフとともに学ぼうと思う。（ただし、今回は被災地や社会的困難を抱える団体の方々にはカンパ要請をしないで応援団をお願いしている）

京都らしい差し入れをお願いできたところもご厚意をプログラムに明示した。地元伏見区の街道沿いで450年以上続くおせきもち、伏見区の工場で聖護院大根を削る千枚漬けの大安、学生とプロジェクトを組んでおられる佐々木酒造や、日本酒「九条」「不戦」を販売するねっとわーく京都からのご提供は、全国からの参加者にたいへん喜んでいただけたし、沖縄からは泡盛「残波」を比嘉酒造からいただいた。お気持ちを受け取った学生たちはとても喜んでいる。しかし本来はお願い段階から学生が主体的に動くことが教育的だったと思う。

1-9, 閉会後の学生たち

機材の返還後、3日ほどの休日のあと、学生たちは年内に残務処理をと集まった。参加者アンケートも集計し、2日間に延べ420名の参加があり、8割の参加者が学生であったことも明らかになった。関心を集めた作品は「ヘイトスピーチ」が首位、次いで大学生が学食などでひとりきりでいる状態を観察した「ぼっちさん」など学生の日常を描いたチーム、3位は「脱走兵を匿う」ベトナム戦争時のフィルム上映、社会問題や時代を超えた反戦運動に注目が集まったことも興味深い。

メールですべてを片付けていた学生たちが、関係各所に手書きのお礼状を書き始めたことには驚かされた。18名のボランティアたちと5名のスタッフの反省の声も集約し、彼ら彼女らは、人生の次のステージできっとこの経験を活かしてくれることと思う。また代表の西村紗帆は、この3月、日本NPO学会で「市民社会における協働のための若者の情報スキルとネットマナー - 「学生版市民メディアフェス 2015」開催経験から」と題して、スキルがあってもマナーの足りない学生のSNS利活用を分析して報告した。『ソーシャル・キャピタル入門 - 孤立から絆へ』の著者の稲葉陽二先生に褒めていただいて記念写真まで撮り、学会デビューも楽しい思い出になった。ハードな日々を送りながらも、研究の題材を見つけていたことに敬意を感じる。

ところで西村さんは、メディアフェスのエンディングで自作の映像を公開した。前年に台湾の太陽花学連の学生を訪ね対談したときの記録映像を独学で編集し、学内コンテストでグランプリに輝いたものだ。学生運動の交流の影響は、映像ジャーナリズムで学生自身が

自立するところまで波及した。彼女がメディアフェスを「おもしろそうだ」と主催する気になったのは、学生でも「おもしろい」映像制作は可能だと実感していたからだ。全国からそういった作品が集まるのが想像でき、上映し交流する意義がわかる学生だからこそ、今回のメディアフェスの裏方を務めることができたのではないだろうか。

直後に下村健一さん（元 TBS キャスター、元内閣府参謀、市民メディアアドバイザー）から学生たちにメールを頂いた。優しいお励まし、最初から最後までありがとうございました。「"神5"のみなさんへ 本当に、僕の予想を遥かに上回る、素晴らしいイベントでした。もう来年以降、「学生版」という3文字は要らないな、これがスタンダードになるな——と感じました。こんな少人数でメディアフェスの歴史を動かした君らは、本当に凄いと思います。」褒めすぎではないだろうか。

2-1, 東北・女川に招かれて

メディアフェスの計画を進め運営で四苦八苦している学生たちに東北大学の坂田邦子先生から「メディアフェスが終わったら、被災地取材に来ませんか」とお誘いをいただいた。予想だにできなかったご褒美である。「大学生（新潟大学、名古屋大学、龍谷大学、広島経済大学、東北大学の学生・教員全34名、うち学生24名）が女川町を訪問し、今の女川町を知る為に現地の方に取材を行い、その取材内容をもとにワークショップ・発表会を開催する」というプロジェクトで、東日本大震災アーカイブ連絡会（代表：坂田邦子）が企画、実施する。女川町産業振興課、女川町観光協会、女川さいがい FM、宮城県観光連盟（『嵐基金』を活用）・みやぎ教育旅行等コーディネート支援センター等の協力を得ており、学生たちは交通費の一部を助成していただき、取材グループに参加する。

坂田先生によると、県外の大学生が東日本大震災の被災地を訪れ、被災した人々や復興に携わる人たちに直接取材を行うことを通じて震災と復興について学び、被災地がどのようにメディアによって伝えられてきたのか、あるいは伝えられてこなかったのか、被災者たちはどのような思いを抱いて生活をしているのか、生の声を聞くことを通じて被災地の現状を知ることが目的だ。そして、取材した内容を地域に持ち帰り、メディアで発信することを通じて、震災を伝えることの難しさを学ぶという。

1日目は、女川町と震災についての話を聞いたり、まち歩きをしたりしながら、女川町の震災と復興について知り、2日目は、グループに分かれ各取材先を訪問し、体験学習（ボランティア）なども織り交ぜながら、女川町の震災の影響と復興の様子について直接取材を行い、また取材した内容をもとに、ワークショップを行い、女川町のこれまでとこれからについて考える。3日目は、県外の地元メディア（コミュニティ FM、ケーブルテレビなど）で「女川の今」を伝えるために、ワークショップを通じて取材内容をまとめて発表する。2月13日（土）から15日（月）の3日間、田和拓朗（運営スタッフ、政策学部3回生）、木村夏奈（運営スタッフ、政策学部3回生）、柴田美智子（メディアフェス2日目、司会担当）の3名が参加することができた。ツアー参加までに、大学混合の取材チームが編成され、Lineで自己紹介し、質問内容を練りあった。事前に訪問先についての情報を共有し、交流のきっかけを作った。

田和くんは失われた桜を植え直す「桜守りの会」の活動に参加、木村さんは津波で流されずに残った蒲鉾会社「高政」に、柴田さんは子どもたちの教育環境を取戻そうとする「向学館」を訪れるグループに参加し、そこで復興に立ち向かう人々のお話をそれぞれに伺った。ほかに、タイル制作で新しい雇用を生み出す「セラミカ工房」、復興のためには高齢者の生きがいをづくりと収入を作る「ゆめハウス」にも他大学の学生たちは取材に赴いた。

2-2, 画像をつなぎナレーションで表現する

学生たちが挑戦するのは、被災地女川で記録された著作権フリー画像の蓄積と当日学生たちが撮影された写真のなかから選択し、それらにナレーションをつけて、女川の人々から受けた感動を表現するという課題だ。

ほかの大学の学生たちはこのデジタル・ストーリー・テリングの制作経験があり、映像表現の方法も詳しい。龍谷大学の学生たちは、映像上映の大会は実施できたものの、自ら制作する機会はなかったため、他大学の学生の経験から教えてもらいながら体験することになった。

女川の協力者の方々に向けて上映した学生の作品は次のとおり。

取材先、高政 木村夏菜「人の力」<https://youtu.be/E09Fd88XAHI>

津波で流された工場を再建し、地域の雇用に尽力した蒲鉾の老舗「高政」の社長のお話をお聞きし、女川の人々の地域への思いと行動力に注目した作品。

取材先、女川桜守りの会 田和拓朗「山学校の復活に向けて」

<https://youtu.be/eK58YNEwYt0>

漁師の人々が山の自然に学び、海とつなぎ、自然とともに生きてきた女川の人々のつながりに焦点をあてた作品。

取材先、女川向学館 柴田美智子「笑顔になれますように」<https://youtu.be/u58E1b2QCHY>

子どもたちが仮設住宅で十分な学習環境を得られないことを憂いながら実施されている向学館の活動で子どもたちの将来を思う作品。これらの作品の報告会は、地元新聞、放送局から取材された。2016. 2. 18 の石巻かほく新聞では「被災地復興、県外大学生が女川取材 地元へ帰りメディアで紹介」の記事で、「東日本大震災で甚大な被害を受けた女川町の現状を学ぼうと、メディア研究などに取り組む県外の大学生らが13～15日の3日間、町内で取材やワークショップを実施した。学生たちは今後、地元のテレビやラジオにそれぞれ出演し、被災地の復興の歩みを発信する予定。県内で震災のアーカイブ活動を展開する大学や企業、NPOなどをつくる「東日本大震災アーカイブ連絡会議」が主催。名古屋大や龍谷大（京都市）、広島経済大（広島市）など5大学の学生と留学生ら24人が参加した。学生たちは5グループに分かれ、コラボ・スクール「女川向学館」や住民グループ「女川桜守りの会」などを取材。被災状況や復興に向けた取り組みなどを聞き取りした。最終日は、一人一人が取材の成果をまとめた1分間の映像を発表。写真とナレーションを組み合わせ、被災地の外に伝えたい思いを込めた。（後略）」と報道された。



(2016. 2. 15 女川駅前にて) 右から 柴田美智子、田和拓朗、木村夏菜、松浦さと子

2-3, 京都コミュニティ放送で番組制作

3月23日(水)、女川取材にでかけた学生3名、田和拓朗、木村夏菜、柴田美智子は京都コミュニティ放送(三条ラジオカフェ)で、女川ツアーの報告番組を収録した。記憶がまだ確かなうちに、と柴田美智子さんが中心にキューシートを書き、番組を進行した。柴田さんは、メディアフェスの司会で活躍したあと、京都市北区と舞鶴市にできるコミュニティ放送局のパーソナリティの試験に合格、ボランティアで活躍することが決定している。

3名のツアー参加者が集まり、番組内容を検討したあとスタジオに入り、リハーサルなしに収録した。マス・メディアを通じて、同情を誘う報道に、被災地が「暗く」「可哀想」である印象を強く抱いていたが、実際に女川の方々にお話をお聞きし、未だ復興途上にあるとはいえ、人々が元気に前向きに復興に関わっていることを実感したと報告した。映像を制作したことや、それがネット上にあることなどを紹介し、20分間の番組に収めた。

学生たちが導入部分の音楽に、NHKの復興支援ソング「花は咲く」（著作権料が義援金として東北被災地に届けられる）、途中音楽がNHK連続テレビ小説「あさが来た」の主題歌「365日の紙飛行機」を選んでおり、NHKの放送に影響を受けすぎているのだが、学生たちにそうした意識がないことに驚く。選んだ学生のものであるので変更を強いなが、意識せずに選曲してしまうマスメディアの影響に本人たちも驚いていた。

番組は、3月31日（木）15時から15時21分に放送される予定である。



(2016.3.23 京都コミュニティ放送で)

3. おわりに

社会科学系科目委員会の「フィールド・教室における対話を育てる教育手法研究」を計画した昨今の今頃は、「学生版市民メディアフェス2015」、「女川取材ツアー」も、「京都コミュニティ放送」での放送も、全く予想していなかった。学生らが参加でき、さまざまな方々と対話させていただける機会をこんなにもいただけたとは思っていなかったが、さまざまな企画が実現し、学生たちが小さな成功体験を抱いて就活や卒論に向かってゆけることは、幸運なことだ。意図せざる教育機会であったが、学生たちは柔軟に受けとめ意欲的に創造的に対応した。このことは、日常的に教室における「対話を育てる教育手法」が進化し、学生たちに浸透していると理解したい。そして、社会科学系科目委員会が意図する「教育力のある」社会科学系科目をめざして、今後も務めてゆきたい。FD予算を用いることができたおかげで、学生たちに多くの体験を提供できたことは、事務職員の吉中真美さんの協力と、費用を節約し、本年提供されたさまざまな機会を応援して下さった科目委員長の妻木先生、同僚の奥野先生、鋤塚先生のご理解のおかげである。ここに記して、感謝申し上げたい。

(了)

参考サイト

学生版市民メディアフェス2015公式ホームページ <http://www.medifes.net/>

学生版市民メディアフェス2015公式Facebook

<https://www.facebook.com/medifes2015/>

龍谷大学映像コンテスト2014 No.6 「龍大生がひまわり学生運動に迫る」

https://www.youtube.com/watch?v=E7R4SD_hwfE

石巻かほく <http://ishinomaki.kahoku.co.jp/news/2016/02/20160218t13003.htm>

宮城県東日本大震災デジタル・アーカイブ連絡会議 <http://311da.com/>

京都コミュニティ放送 <http://radiocafe.jp/>